

## 科学への公衆の参加 (Public participation in science)

Bucchi and Neresini “Science and public participation”

PUS (public understanding of science)の三つのモデル (three models of PUS)

### (1) 欠如モデル(deficit model)

Wynne 1991 などによって指摘された PUS の暗黙の前提

欠如モデルの三つの前提(B&N p. 450)

- 1 科学理解とは科学リテラシー(scientific literacy)を高めること
- 2 科学についての理解が深まれば科学や技術革新への肯定的な態度が保証される
- 3 科学と公衆の関係に問題があるとすればそれは公衆の側にあると考える傾向

### (2) 科学の批判的・解釈的公衆理解(critical/interpretive public understanding of science)

同様の考え方はいろいろな論者が提案しているがこの呼び方は Michael 2002 による

・一般人は専門家と異なるタイプの知識(lay knowledge, local knowledge, indigenous knowledge など)を持っている。チェルノブイリ事故のあとのイギリスにおける radioactive sheep の事例など、現地の農家の方が事態を正しく把握していた。

・一般人が科学者の言うことを理解しないように見えるのは、単に彼らの求めている情報でなかったり、そもそも科学者を信頼していなかったりするため、知識が欠けているわけではない。

### (3) 科学知識の共生産 Coproduction of scientific knowledge (B&N p.452)

カロンらが提唱するモデル。 Michel Callon “The role of lay people in the production and dissemination of scientific knowledge”

PUS の二つのモデルはどちらも科学者と公衆の二分法を前提としている点が共通

一般人が科学的知識の生産に積極的に介入する場面もあるはず。

- ・医療研究における患者団体の参加
- ・サイエンスショップ (Science shop)：大学や NGO が市民から要請のあった研究を行うというとりくみ。オランダで発祥。日本では大阪大学で現在試行中。

・法廷における科学 (science in court)。科学と法廷では知識のただしさを確認する手段が大きく異なるが共通点は模索されるダウバート基準(Daubert criterion)をめぐる議論など。

科学への社会参加をうながす公的な取り組み  
(formal initiatives promoting public participation in science) p.457

国民投票 referenda

公衆ヒアリング public hearing

公衆意見調査 public opinion survey

交渉による規則決定 negotiated rule-making

コンセンサス会議 consensus conference

市民陪審 citizen' s jury

上にいくほど公的性格がつよい

解釈の枠組み (p.459)

こうしたさまざまな取組はどう分類すべきか

Rowe and Frewer の枠組み (2005)

公衆へのコミュニケーション (public communication) スポンサーから公衆への情報の流れ

公衆のコンサルティング (public consulting) 公衆からスポンサーへの情報の流れ

公衆の参加 (public participation) スポンサーと公衆双方向の情報の流れ

B&N はこの枠組を批判(p.460)

科学への公衆参加では情報の流れだけが問題になるわけではなく、交渉や新しいアイデンティティの生成もおこなわれる

公衆の側が自発的に行う参加が視野に入らない。

コンセンサス会議の仕組み(consensus conference)

- ・運営委員会が市民パネル(lay panel)を公募 十数人程度
- ・専門家パネル(expert panel)は別に選定
- ・会そのものはファシリテータが運営
- ・市民パネルがまず鍵となる質問(key question)をまとめる
- ・専門家パネルは鍵となる質問への答えを用意し、市民パネルと質疑を行う。
- ・専門家パネルから得られた情報をもとに、市民パネルだけで「コンセンサス文書」をまとめる。

(市民陪審も似たようなしくみだが、日数が短い)

小林傳司『誰が科学技術について考えるのかコンセンサス会議という実験』(名古屋大学出版会)

対案：二次元の地図上に表示 (p.462)

ひとつの軸はスポンサーがいるかないか (sponsored or not)

もうひとつの軸は参加の強度 (intensity of participation)

	強度低い	強度高い
スポンサーいる	公衆の意見調査 参加型アセスメント	熟議民主主義イニシアティブ (コンセンサス会議など)
スポンサーいない	局地的な抗議活動	患者団体

カロンらは参加の強度を知識生産のどの段階で公衆が介入するか(access-point)によって分類

・ 実験室 laboratory から現実の状況 real-life situation へ翻訳 translation する段階：コンセンサス会議などスポンサーのある公衆参加の多くはこの形態

・ 研究集団 research collective の設定の段階：AIDS の患者団体が研究プロセスにくい込む例など

・ 研究課題の当初の認知 initial recognition of research problems の段階：研究すべき課題があるということを市民の側が科学者に訴える例など

[コンセンサス会議は 462 ページの図ではかなり強度が高い方になっているが、他の多くの場面ではその程度の強度すらないということか。]